

災害時における宿泊施設の役割と防災上の課題

仙台秋保温泉 岩沼屋 支配人 渡辺 敦支

当館は秋保温泉で寛永二年（1625年・江戸時代初期）より暖簾を受け継ぐ温泉宿でございます。当初は温泉による湯治を目的とした自炊宿だったと思われま。江戸時代の中期頃より現在のような食事を提供する温泉旅館として営業形態を変化させ、昭和に入り木造の建物から耐火・耐震構造の近代化された鉄筋コンクリートのホテルへと時代に合わせて進化してまいりました。400年という永い時代背景には明治維新や戦争、そして様々な災害もございました。当館では太平洋戦争時において疎開先としての役割も果たしており、当時を知る方々は今でも懐かしさで来館されております。また県内において洪水被害が起きた際には被災地域にバスを用意してお風呂をご提供するなど、小さなことではございますがその時々で我々に出来得る地域貢献に取り組んでまいりました。

今から約10年前、阪神淡路大震災のあとで更に宮城県沖地震が予想されていた時期でもあることから、東北電力様より災害時における協定の依頼を受けました。これは大規模災害が起きた場合において最優先で宿泊の受入を行うとの内容でしたが、締結した当時それが現実となる日が来るとは正直、思ってもいませんでした。

そして東日本大震災が発生。翌日から電力復旧の為、全国各地から数百名の作業員の方々が滞在し、当館を拠点として各現場に向かうという日々が続きました。

市内中心部の宿泊施設より、当館をはじめとする郊外の温泉宿泊施設がこのような宿泊拠点として活用出来たのには理由がありました。停電でエレベーターが使用出来ず、しかも余震が続く状況下では高層階の客室は危険で使用が出来ません。当館では和式の宴会場を低層階で多く保有し、そして客室で使用している寝具がベットではなく移動のし易い布団であった為、畳の宴会場に布団を敷いて寝る場所を確保出来ました。そして駐車場も立体式では無く広く敷地内にあることで、車高の高い作業車や大型車両であっても問題なく停める事が出来ました。食事の提供は満足に出来ない状況でしたが、温泉が使用出来るという事に、なにより作業員の方々には喜んで頂けました。

電力の復旧が終わると今度は各警察の応援部隊、プレハブメーカー、ボランティア等々、述べ10万人以上の方々に宿泊拠点として活用して頂きました。

あれから7年を迎えようとし、震災の事が風化している風潮もよく耳にするようになりました。昨年11月15日に太白消防署様の指導の下、大規模な防災訓練を執り行いました。

通常は社内のスタッフだけで行なっている訓練ですが、今回は地元の秋保小学校の児童と婦人防火クラブ、秋保消防団、旅館組合などのご協力を得て100名を超える大掛かりな合同防災訓練を行う機会を頂きました。太白消防署の方々と事前に綿密な打合せを重ね、当日は出火場所でスモークを炊いて臨場感を出し、児童は濃煙テントで煙の怖さを体験したりと非常に緊張感のある有意義な訓練となり、社員の防災意識も高くなりました。

無事に訓練は終えましたが今後の課題も多いと感じました。その一つは本部と現場で避難者の人数相違があり、情報が錯綜し混乱を招いたことです。実際の現場においては正確な情報伝達の難しさと大切さを痛感しました。また非常時の避難誘導においても、さまざまな問題が垣間見えました。既に始まっている高齢化社会、数年後の東京オリンピックとパラリンピックを控え、お身体の不自由な方々や訪日外国人も増加傾向にあります。

これらの方々が宿泊されたとき、正確に情報を伝え安全に避難誘導が出来るのかを今一度、しっかりと検証しなくてはなりません。病院や介護福祉施設の方々に話を伺い対策を立て、万一の事態にしっかりと備える取り組みをしなければならぬと痛感しました。私たち宿泊施設はお客様の生命と財産を守る責務があるという事を再度認識し、安心と安全を高い次元で提供出来るように避難計画の見直しとマニュアルの更新を常に行い、油断することなく防災意識を一層高めることに取り組んでまいりたいと思います。

